



Discussion Paper No.203

海外実地研修（OFW）に関する教員アンケート報告書

岡田 勇

February 2017

**Graduate School
of
International Development**

**NAGOYA UNIVERSITY
NAGOYA 464-8601, JAPAN**

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科

題 目：

海外実地研修（OFW）に関する教員アンケート報告書

執筆者名：

岡 田 勇

目次

- I. はじめに
- II. 調査概要
- III. 各質問項目についての結果概要
- IV. クロス分析：背景・条件などが与える影響
- V. おわりに
- 文末資料：質問文と回答選択肢

略称

GSID	Graduate School of International Development	国際開発研究科
OFW	Overseas Fieldwork	海外実地研修

I. はじめに

この報告書は、国際開発研究科(GSID)の教育カリキュラムの1つである海外実地研修(OFW)について、引率教員を対象として2016年に実施されたアンケートの結果をまとめたものである。OFWは1992年から2016年までに、タイ、フィリピン、カンボジア、インドネシア、中国、韓国と、6カ国で実施されてきた(表1)。当初は1か月間にわたり主に日本人学生を中心として、途上国の開発現場の課題について実地で学ぶことを目的とした重厚な内容であったが、やがて研修先が多様化するに伴い、引率教員の負担や財政負担の軽減から2週間程度の滞在で、留学生を多く含む形態へと変化した。

表1：OFW実施国と実施年（1992～2016年）

OFW実施国	OFW実施年
タイ	1992年、1993年、1998年、1999年、2002年、2008年、2009年
フィリピン	1994年、1995年、2000年、2004年、2015年、2016年
インドネシア	1996年、1997年、2010年、2011年
中国	2001年
韓国	2003年
カンボジア	2005年、2006年、2007年、2012年、2013年、2014年

このカリキュラムには、これまで 50 名を超える教員が関わってきた。毎年、約 4 名の教員が調査計画の策定、調査引率、報告書の作成に携わり、これに加えて OFW 担当助教が雇用され、運営面でのサポートから教育指導までに携わってきた。こうした活動に関わった引率教員によって実地で積み重ねられた知見は膨大・多岐にわたる。この知見を何らかの形で残したいというのが、本報告書の主な目的である。OFW の成果や手法についてまとめたものとしては、長峯ほか（1994）、梅村（2002）、長田ほか（2004）、廣里・大橋ほか（2007）がある。いずれも複数の教員が共同研究の形で関わった労作である。本報告書は屋上屋を重ねることを避け、引率教員へのアンケートという手法により、広い視野での知見を集めることとした。また、作業を効率化（負担軽減）しながら、アップデートしたものとも言える。

今日、OFW と GSID をとりまく状況は様変わりしつつある。既に前回の報告から 10 年以上が経過し、その中で OFW を経験した多くの教員が GSID を去り、多くの新たな教員が GSID の一員となった。また創立 25 周年を迎えた 2016 年、GSID は再編の流れの真ただ中にあり、OFW の再検討もまた近い将来の課題となりつつあるように思われる。このような変化の中で、報告書は緊急的にまとめられたものでもある。

本報告書をまとめるにあたり、過去に OFW に関わった 37 名の教員の皆さんからアンケート調査への協力を頂いた。その中には既に GSID を離れられた 15 名の方もおられる。まず、この 37 名の方々に心からの感謝を述べたい。そうした方々からは、アンケート文中あるいは依頼メールへの返信という形で、GSID 全体への叱咤激励をいただいた。その一部は本報告書の中でご覧いただくことができる。そのようなメッセージが、GSID の今後にとって何らかの示唆をもつようであれば幸いである。

本報告書では、諸般の事情に鑑み、以下のような方針を取ることとした。これらの方針のために、アンケートへの回答を 100%漏れなく活かすことはできていないかもしれない。しかし、これらは本調査を遂行するために欠かすことができないものであり、どうかご容赦・ご了解いただきたい。

- 本調査は、過去の OFW で積み重ねられてきた知見をまとめた参考資料である。アンケート調査の一部は今後の OFW について問うてはいるが、研究科として OFW の方針に関する評価や判断を行うものではない。

- 本調査は、関係教員へのアンケート調査を主たる情報源としており、その中で個々の関係者の主観的評価にもとづいて OFW を振り返っている。そうした情報源は、ほぼ聞き取り調査に近い具体的な内容を含む場合もあるが、必ずしも逐一紹介することをせず、調査者の視点から整理を行った。
- 本報告書では、アンケート調査で得られたすべての情報につき、個人名を排除し、また個人の特定を可能とする恐れのある情報を加筆修正している。そのため、回答として引用しているものの一部は、本来の内容と異なる場合がある。
- 以上により生じるあらゆる問題と過ちの責任は調査者にある。

以下、本報告書は 4 つの部分から構成される。まず II 節では、アンケート調査の概要について述べる。続く III 節では、調査の各質問項目に対する回答についてまとめる。第 IV 節では、いくつかの質問項目の関係について若干の推論を試みる。アンケート調査の利点は複数の関係者に同一の質問項目をたずねることができることであり、これによって個々の回答から直接的に現れるものではない、一般的な傾向を見ることが出来る。そうした傾向の把握は、アンケート調査の強みであるだろう。最後に、第 V 節では本アンケート調査で用いられた質問文と回答選択肢について一覧表示している。アンケートの形式を正確に知りたい方は、そちらを参照していただきたい。

II. 調査概要

本調査は、下記の内容で実施された。

調査期間：2016 年 11 月 2 日～25 日

調査対象：1992 年～2016 年に OFW に参加した GSID 側の引率教員（一部学外からの協力者を含む）で、カウンターパート大学等の協力者は含まない。

方法：Google Form を用いてアンケート・フォームを作成し、メールを通じて対象者に回答を依頼した。

回答率：78.7% （回答者 37 名、依頼対象 47 名）

調査の質問文と回答（選択肢・自由記述）は、本報告書の末尾に添付している。以下は、調査方法についての留意点である。

- (1) 本調査への回答を依頼するため、研究科内関係者よりメールアドレスの提供を受けた。この過程でメールアドレスが入手できず、回答依頼を行えなかった対象者が4名いた。過去に OFW に参加した GSID 側の引率教員は、調査者の把握した限りで合計 53 名いたが、うち 2 名は既に逝去しており、先述の 4 名はメールアドレスが不明であった。
- (2) 本調査では回答率の向上および質問項目数の縮減のために回答者の氏名を問うた。1 名を除き、36 名の回答者が氏名の告知に応じた。回答依頼の際、調査者以外への個人名の情報共有を行わないことを誓約した。
- (3) 回答者の OFW 参加回数は 1～8 回である（質問項目には含めず、調査者の側で調べた）。このような参加回数の多様性は、回答者の他の属性と相まって回答内容に影響を与えた可能性がある。
- (4) 調査者もまた 2015 年と 2016 年の引率教員であったが、調査対象から外れることとなった。
- (5) 回答者のうち、15 名は既に GSID を離れており、残り 22 名は 2016 年 11 月時点で GSID に所属している。また後者においても OFW への参加回数ならびに参加年にはバリエーションがある。本調査では基本的にこの点を考慮に入れていないが、回答者氏名を確認しているため、分析の際に留意することは可能であった（目立った傾向が見られなかったので分析結果として報告していない）。

III. 各質問項目についての結果概要

以下では、各質問項目についての結果の概要をまとめる。

1. 役割

回答者には、OFW 委員長経験者が 11 名、OFW 委員（委員長以外）が 30 名、OFW 担当助教が 5 名、その他（キャンパスアセアン担当助教、

学外からの協力教員など）が若干名含まれる（複数回答可）。

以下の質問項目によっては、役割によって回答内容が大きく異なる場合もありうる。例えば「何が困難な課題であったか」への回答は、委員長とそうでない委員、担当助教の間で異なることが想定されるが、個人を特定することになる可能性があるため、区別を行っていない。

2. 調査国

回答者が訪れた調査国は、多い順にカンボジア（19名）、フィリピン（15名）、タイ（14名）、インドネシア（10名）、韓国（5名）、中国（4名）であった。これはそれぞれの国での調査回数と概ね比例している。カンボジアが相対的に多く、タイが少ないが、これはタイでの OFW が 1990 年代に多いのに対して、カンボジアでは 2005 年以降に集中していることが端的な理由であろう。

3. OFW に参加した教員の属性

次に、OFW に参加した教員の属性について確認したい。本調査では、初参加時の勤続年数、調査国の訪問経験、調査の経験、年代について質問している。これらの情報を質問したのは、OFW がその一般的特徴として、GSID の目玉事業であると同時に、多大な負担を要求するという 2 面性を持つためである。こうした特徴に鑑みれば、引率教員個々人の能力と負担によって異なった経験が生まれ、さらにその帰結として異なった評価や提言を導いている可能性もあることは、容易に想像できるだろう。いずれにしても、後半で示される OFW についての様々な提言は、以下に示す属性を踏まえて理解すべきである。

(1) OFW に初めて参加した年の勤続年数

図 1 は、引率教員が OFW に初めて参加した年に、どれくらいの勤続年数があったかをまとめたものである。回答者のうちおよそ 3 分の 2 (24 名) が、勤務し始めてから 3 年以内に OFW に参加している¹。

¹ 2 つの留意点がある。第 1 に、OFW は GSID 創立とほぼ同時に開始されたため、初期の参加者は勤続年数が当然少ない。ただし、この頃の OFW 引率教員が回答サンプルに占める割合は極めて小さい。第 2 に、

図1 初参加時の勤続年数
あなたが初めてOFWに運営側として参加された時、GSIDでの勤続年数はどれくらいでしたか。

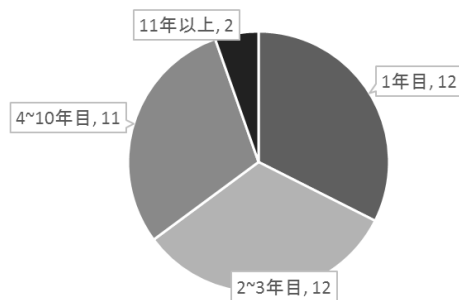
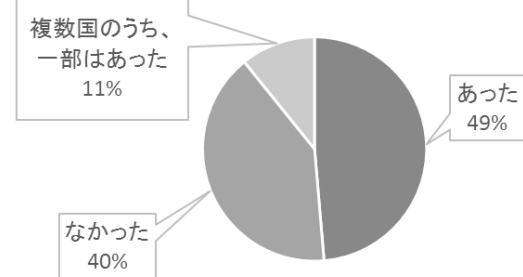


図2 調査国の訪問経験
あなたはOFWに参加される前に、そのOFW調査国を訪れたことがありますか。



(2) OFWに参加した時の年代

次に、OFWに参加した時の年代を見てみると、30代が12名(32.4%)、40代が18名(48.6%)、50代が13名(35.1%)であった。前期の勤続年数と対照させると、勤続3年以内に初めて参加した教員には30代、40代が多く、4~10年目には40代、50代が多いのは確かだが、必ずしも一致するわけではなかった。

(3) 調査国の訪問経験

上記の背景情報はそれ自体で興味深い、それだけであたたかも多くの教員が不慣れな中OFWに参加していったと想定するのは早計である。以下では、引率教員が調査国を訪問したことがあったか、また実地調査を行った経験を有していたかについて報告する。

図2は、引率教員が、調査国を以前に訪れたことがあるかどうかについて尋ねている。およそ半数が訪問経験を有していたことがわかる。

(4) 調査経験

表2は、回答者が何らかの調査に参加した経験を有するかどうかを訪ねている。33名が何らかの調査経験があり、さらに20名は小集団での実地研修・実地調査に参加したことがわかった。他方で、学生時代にOFWに参加した方は6名いることがわかった。

回答者の中にOFW担当助教も含まれており、その場合も勤続年数は少ないと予測される。しかし、この影響も思ったほど大きくない。

表 2：調査経験

	有	無
学生として GSID の OFW に参加したことがある	6	31
OFW に類似した小集団での実地研修・実地調査に参加したことがある	20	17
個人でインタビューやサーベイを行ったことがある	33	4

以上は、次のようにまとめられる。回答者の多くは、GSID での長い勤務経験を経て OFW に参加したわけではなかった。しかし他方で、多くは既に何らかの調査経験があり、半数近くは調査国にも訪問経験があった。これらから、OFW に参加した教員が調査活動について独自の経験や視点を持ちながら参加した可能性が指摘できる。したがって、以下で示す OFW についての評価や困難な課題への提言は、一律的でない多様な属性条件から生み出されたことであろうことを示唆している。

4. OFW の目的についての評価

OFW には発足当時に打ち出された 4 つの目的があり、GSID のパンフレットや OFW オリエンテーションなどで継続して表明されてきた。本調査では、1992 年～2016 年まで通時的に OFW の成果をはかる適当な指標として、この目的の達成度について尋ねた。またそれに合わせて、OFW の目的が変化して新しい目的が生まれているか、目的が十分に達成されるために改善されるべき点は何かも尋ねた。

(1) 目的の達成度

目的の達成度についての評価をまとめたものが表 3 である。半数以上が「大いに達成されている」と回答しており、「全く達成されていない」との回答は極めて少ない。4 つの目的の中で最も評価が高いのは「フィールドワークに必要な基礎知識やスキルを身につける」である。しかし、この目的については「全く達成されていない」との回答もある。評価が比較的分かれているのは「さまざまな利害関係者の間で問題解決を図るために必要な見識や能力を身につける」という目的であり、約 3 分の 1 が「あまり達成されていない」「全く達成されていない」と評価した。

表 3 目的の達成度についての評価

	大いに達成 されている	ある程度達成 されている	あまり達成 されていない	全く達成さ れていない
「途上国が直面する開発の諸課題を学生が直接見聞し、実践的に理解する」	20	14	3	0
「フィールドワークに必要な基礎知識やスキルを身につける」	27	7	2	1
「さまざまな利害関係者の間で問題解決を図るために必要な見識や能力を身につける」	22	3	10	2
「異なる文化的・専門的背景をもつ参加者とのコミュニケーション能力をにつかう」	20	13	4	0

(2)目的の変化、新しい目的

以上の4つの目的についてある程度の評価が確認できたが、発足から約四半世紀経過した OFW の実地経験を踏まえて、より具体的な目的が見出されている可能性もある。また、4つの目的とは異なった考えを抱いた教員もいるかもしれない。そこで、OFW の目的が変化したかどうか、新しい目的があるとするれば何かを尋ねた。

得られた回答には概ね、(A) 変化はない、(B) 変化はないが不十分な点がある、(C) 形式面の変化、(D) 現地国との関係性における変化、(E) OFW 参加学生にとっての意義の変化、(F) 新たな目的を検討すべき、といったものが見られた (A～F の分類は調査者による、以下全て同様)。

それぞれの回答については以下にまとめたが、概ねの傾向を3点にま

とめることができる。第 1 に、4 つの目的について明示的に問題視する回答はなかった。むしろ、そうした目的が不完全にしか達成されていないとの指摘があった。

第 2 に、OFW に参加する学生や、訪問する調査地との関係性が変化してきたことに着目する回答が多くあった。以前は日本人学生が開発問題を現場で見るというものであったが、近年は参加学生の過半数が留学生となり、現地での協力大学の学生の能力も高いものがある。そうした中、現地から何を学ぶか、何をどのように調査するかについて再確認・再検討する余地があるのかもしれない。

第 3 に、提言されている内容は様々であるが、時代の変化に応じた調査目的の変化を提言する声が多かった。その中には、途上国のかかえる開発課題の変化、グローバル状況の変化、MDGs や SDGs といった開発目標の登場を踏まえたり、ビジネスや多文化共生といった視点を取り入れたりすることがある。もちろん、これらをどのような調査地域でどのように行いうるかは様々であり、直ちに OFW の一貫した目的とするのは容易ではないが、議論の余地はあるように思われる。

Q: 初めて OFW が実施された 1992 年から、24 年経ちました。この間、OFW の目的は変化したでしょうか。もし新しい目的が生まれているとしたら、それは何でしょうか？

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 変化はない

- ・変化していない
- ・あまり変わっていないように思う。
- ・とくに変化はしなかった。実施委員による。
- ・OFW の主な目的は、院生が途上国に出向き、開発問題が実際にはセクター別ではなく、学際的な問題であることを体験的に理解することにあると思う。その点において変化はない。

(B) 変化はないが不十分な点／要改善点がある

- ・変化していないが、上記の目的を培う機会が準備・整備されていない。
- ・短期間で、プロセスのみでなく結果をどのように求めるかは、再検討の必要がある。
- ・川喜田博士の「KJ 法」や JICA の方法論など、フィールドで収集した生のデータを課題ごとに整理、因果関連図を作成し、学際的なグループ及び全体討議（ブレインストーミング）を通して多様なアイデアを統合、分析して新たな発見を生み出す手法

は有効。そこから導出される政策含意が開発現場でどの程度有効かどうかの「検証」が要求される。

(C) 形式面の変化

- ・実施期間が参加者にとって適切になった。

(D) 現地国との関係性における変化

- ・現地から「問題」を学ぶだけでなく、「可能性」にも目を広げたい。
- ・調査される側の視点を考慮する。
- ・「フィールドワークに必要な基礎知識、スキル」及び「途上国に直面する問題解決能力に必要な基礎知識、スキル」は依然重要。加えて、教育の国際化に伴い、「現地国の学生との交流」も重要に。
- ・東南アジア諸国の経済成長と社会の変化に伴い、現地の学生たちもかつてより自信をつけ、知識やスキルも高まってきた。それによって、「途上国の学生」というイメージも変わってきており、OFWに参加した学生たちは現地のパートナー大学の学生たちから以前よりももっと刺激を受けているのではないかと。そうした意味で、OFWの目的は「途上国の課題」に対する理解を越えて、「対等な立場の国」同士の関係のなかで、お互いの理解を深めるものへとシフトしてきているのではないかと。

(E) OFW参加学生にとっての意義の変化

- ・当初は、海外村落部での調査経験のない日本人学生に経験を与えるものであったが、近年は留学生比率が高くなっているため、後者に対する目的を明確にする必要がある。
- ・途上国で学生が個人でフィールドワークを行うのが難しかった当初と比べ、昨今は修論のために現地調査に行く方法も多様化し、研究科の教員がアレンジすることの意義は低下していると思われる。途上国から来ている学生の第三国への旅行機会を提供する場になっている面も感じられる。

(F) 新たな目的を検討すべき

- ・以前は、農村における貧困及び格差問題の現状と課題をフィールド及び現地での討議を通して把握し、解決に向けた提案をプレゼンテーションを通して相互に学習することで、データもアプローチも地域限定でミクロ的視野に基づいていたが、今日のように開発課題が農村の貧困を超えた、グローバルな課題（成長、地域格差、難民、地域連携等）及び多様な開発主体（担い手）に広がっている状況下で、新たな目的と手法が検討されるのではないかと。
- ・基本目的には変化がない。ただ、対象国は経済発展を遂げ、経済もグローバル化しているので、調査をする際に地域開発あるいは農村開発の観点のみでは限界が出

てくる。簡単ではないが、都市において都市問題あるいは製造業やサービス業に関する新しいタイプの OFW 実施の可能性を考える必要があるかもしれない。

・21 世紀に入って、途上国での調査を集団で行かなくても実施しうる場合も多い。個人レベルで調査がむずかしい国家や地域あるいはテーマに限定すること、また、途上国の国家内での格差の問題を取り上げることなどが、新たな目的ではないか。

・日本と東南アジアをはじめとする対象国との経済・技術水準の差が縮まり、これからは、日本が一方的な援助をするというのではなく、場合によっては、テクノロジーの分野でも、こちらが学ぶという意味あいもでてきた。また昨今、日本においても、いわゆる、伝統的な「日本人」のカテゴリーに入らない人々のプレゼンスが相対的にましてきて、日本国内でも、異文化接触、多文化共生が、いやおうなく現実の問題となってきた。状況を鑑みると、そのような異文化接触、多文化共生という意味では、「先進地域」としてのアセアン諸国の状況に学ぶという意味も出てきた。

・MDGs、SDGs の貧困研究と実践はどこでどうやれば適切なのか。

・人材育成という観点をさらに押し出すべき。

・援助する立場から、援助しつつ益を得る立場への変化。

・開発途上国が援助対象としてだけでなく、ビジネスの対象市場としても重要となってきた。OFW を援助対象だけでなくビジネス対象としての視点も加味した形で発展させられないか。

(3) 目的を達成するために改善されるべき点

他方で、既存の目的や新しい目的について、それを実現するための方策を考える必要もある。本調査は過去に OFW に参加した教員を対象にしていることから、要改善点についても尋ねた。

得られた回答には概ね、(A) 事前準備の強化、(B) 学生の自主性の促進、(C) 調査デザインの再考、(D) 教員側の意識向上、(E) 運営面・外注の検討、(F) カウンターパート大学との連携強化、(G) 短期間調査としての目的の明確化、(H) 期間の拡大、(I) スポンサーへの報告、といったものがあつた。

具体的には以下を参照いただきたいが、2 つほど傾向が確認できる。第 1 に、指摘された改善点は実に多様である。これは、一方で改善すべき点あるいは改善できると思われる点があちこちにあるということを指しているが、他方で回答者によって何を改善点として感じるかは異なっていることも意味している。挙げられている要改善点の中には異なった方向を指しているものもあることから、実際に大きな改善・修正に踏み

切するためには、各年の OFW 実行委員会による判断や、研究科としての意思決定が必要なように思われる。

第 2 に、ある種の制約要因も垣間見える。例えば期間の拡大や、一部外注の可能性が指摘されている。これらは、おそらく OFW の目的達成をさらに求めるというよりも、それらを求める上での制約の除去といったものであろう。一方で事前準備や調査デザイン、学生や教員のイニシアチブの向上といった「インプット強化」が求められるが、それらを行うための環境設定も同時に取り組まなければならないだろう。

Q: OFW の目的が十分に達成されるために、改善されるべき点は何でしょうか。
(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 事前準備の強化

- ・事前の準備を強化すること。
- ・事前学習に、OFW に則したグループ調査方法の実習を行う。
- ・調査に入る以前の情報把握と認識、問題意識と調査目的の共有。

(B) 学生の自主性の促進

- ・実地調査特論で知識の学びと実践の繋がりを重視すべき。また、学生の自主参加、自主企画などの訓練を入れるべき。
- ・実地研修のスキルの獲得と研究科による旅程やインタビュー先や通訳手配や病院の手配などのお膳立ては両立しにくい気がするので、もっと学生が自分で右往左往する形にした方がいい。
- ・計画段階、現地関係機関との連絡調整に学生自身ができるだけ関わること。
- ・学生に問題意識を持たせることである。

(C) 調査デザインの再考

- ・資金面から実施計画を立てるのではなく、教育目的から再構築すべき。
- ・通訳を介さないと調査できない点（カンボジアの場合はクメール語）を改善する必要がある。
- ・2002 年タイ OFW のように、1 回の OFW の中で、学際的なグループとセクター別のグループでの調査があると、より学びが深まると思う。

(D) 教員側の意識向上

- ・実施委員の調査テーマ提起力。そのための委員間の話し合い・勉強会。現状では学生は熱心（方向性・理論化は弱い）。教員はついて行っているだけ。

・年度間での学内連携に乏しい。毎年、実施場所が変わり、担当教員も変わるため、前年度の経験が次の年度の実践にあまり生かされない。

(E) 運営面・外注の検討

・旅行会社等によるフィールドワークもある中、大学教員が引率する付加価値は何かを議論するべきではないか。また、特に付加価値がない部分（ロジ手配やアポ取りなど）は、外注することも考えていいのではないか。

・安全管理に十二分の配慮が必要。

(F) カウンターパート大学との連携強化

・OFWの目的、方法論についての事前の「相互学習」をもっと重視すべきだ。事前学習は、OFW連携大学（海外、国内）なども含み、教員が共同研究、共同講義、院生指導などを通して連携協力を強固にしておくこと。特に指導教員同士の情報共有が大事。

・事前・事後学習の効率的、効果的な実施。提携大学の教員や院生との情報交換や連携はスカイプ等で以前よりも積極的に行える環境にあると思う。

(G) 短期間調査としての目的の明確化

・2週間という短期間の調査で提言が行えるほど、事は簡単ではないということを参加者に理解させるべき。限られた時間の中で、できる限り現地の住民の中に溶け込み、つぶさに観察し、状況をできるだけ詳しく把握させる。性急な答えを出して終わりというのはまずい。

・現地の人々の生活そのものに触れる機会をもう少し増やすこと

・2週間のフィールドワークではたいした経験と能力は身につかない。その現実を見据え、あまり深刻な調査は気取らない方がいいと思う。参加者の素朴な発見や自分を見つめ直す成長の過程を大切にすることが良いと思う。

(H) 期間の拡大

・14日間という日程にしては、目的が大きすぎる。もし可能であれば、もう少し期間を長くすることも良いが、諸々の条件で難しさもある。

・各種の経済状況が厳しさを増しており、かつ参加する教員・学生への負担も考えるとなかなか困難ではあると思うが、可能なら期間をもう少し長く取ればよい。

(I) スポンサーへの報告

・OFW実施後のスポンサーを交えた「成果報告会」も必要。

5. 困難な課題への対処

続いて、OFWの運営者としての経験から多くを学ぶため、(1)本調査の前、(2)本調査の最中、(3)本調査の後、の3時点において、何を困難と

感じたか、それに対してどのように対処したかを尋ねた。困難と感じた点については、OFW 参加から長い時間が経っている回答者もいるため、いくつかの点を例示した。また「その他」を選択し、自由記述も可能とした。対処方法については、自由記述による回答とした。

(1) 本調査の前

本調査前に感じた課題についての回答は、表4のとおりである。「グループワークの指導」を困難とした回答が最も多いが、回答者の中に委員長や担当助教の経験者が少ないのに対して、委員を経験した人が30名と大半だったため、自然な結果であろう。次に困難を感じたのは「カウンターパート（大学、現地政府など）との調整」であった。カウンターパートとの調整は事前準備の最初から最後まですべてに関わるため、これも直観的に理解しやすい。それ以外の点も、概ね広く共有されているようである。また、特定の年にかぎって噴出した課題もあったことがうかがえる。

表4：OFWの本調査を開始する前に、何が困難でしたか。（複数回答可）

(1) グループワークの指導	19
(2) カウンターパート(大学、現地政府など)との調整	17
(3) 事前調査の実施	10
(4) 調査目的の設定	10
(5) 本調査に向けての移動・宿泊・支払などの調整	9
(6) 事前講義の設計や運営	8
(7) 調査対象国や対象地の選定	7
(8) 参加人数の設定	7
(9) 前年度からの引継	6
(10) 予算書の作成	3
(11) その他	
他の OFW 委員や助教との人間関係	PCM 導入の可否
OFW 委員長によって方針が違いため、それを理解して、合わせること。	
調査地の安全の確認	参加者の募集や確定
新規採用で慣れていない助手のかわりをした。	
参加学生の事前調査と問題意識形成の確認	
科研費など外部資金が付いたので、お金を使い切ることが大変だった。	

次に、困難な課題への対処方法、および留意点について尋ねた。回答は概ね、(A)対処ができなかった、(B)ゆとりをもった対処、(C)前年度からの引継ぎ、(D)事前講義についての留意点、(E)素地が十分でないことへの対処、(F)OFW 委員間の調整、(G)カウンターパートとの調整、(H)グループワークへの対処、(I)学生主体の調査デザインの提言、といった内容であった。

一見してわかるとおり、参加経験がないまま委員長になって対処できなかった方から、学生主体の調査デザインを実行に移すことができた方まで、大きな多様性が見られる。また、OFW 委員間やカウンターパートとの調整、学生グループワークが重要であったとの回答が多かった。課題となった場合もあったが、問題解決のために役立った場合もあったようである。他方で、学生や教員が現地調査について十分な素地を持っていなかったり、また現地についての情報も不足したりしている場合に何ができるのかという鋭い指摘もあった。

具体的には以下を見ていただきたい。

上記の困難な課題に対処するため、どう対処しましたか。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。(簡潔にお書きください)

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 対処できない

・参加経験もなく、いきなり委員長になり、大変困った。対処できなかった。

(B) ゆとりをもった対処

・試行錯誤から始まり、経験が蓄積されマニュアル化が進んだが、予測が難しいリスク管理には常に留意すべき。

・完璧を求めず、ゆとりある運営を心がける。

(C) 前年度からの引継ぎ

・前年度のOFW教員にOFWの全体像を聞いた。

(D) 事前講義についての留意点

・事前講義の講師のご都合と本プログラムの日程を合わせること。

・事前講義と現地調査の関連性。

(E) 素地 が十 分 でないことへの 対 処

- ・現 地 調 査 を経 験 したことがない教 員 と参 加 学 生 の間 の 調 整 。
- ・調 査 地 の現 状 を知 らないことを前 提 で、調 査 目 的 や調 査 計 画 を作 成 するとい う無 茶 をさ せ ないこと。現 実 は、現 状 の表 面 的 理 解 に過 ぎ ない(調 査 研 究 として は失 敗 である)の に、調 査 研 究 を行 ったとい う間 違 った達 成 感 を持 た せ ている。現 状 を知 る・理 解 するこ とに重 点 を置 くこ とを指 導 した。
- ・調 査 目 的 と意 義 を、事 前 に十 分 時 間 をか けて検 討 して、現 地 に行 か ないと、どうし てもわ かり ないこ とで、か つ意 義 の大 きなものを選 択 するこ と、お よび、調 査 の方 法 も、質 問 紙 とインタビュウの精 緻 化、洗 練 化 と、他 の方 法 の模 索 等 にもよ り時 間 をか ける べき。

(F) OFW 委 員 間 の 調 整

- ・委 員 長 とのコミュニケーションをよく図 るこ と。
- ・指 導 教 員 同 士 の連 携 を図 るこ と。
- ・OFW 委 員 長 と担 当 助 教 のみならず、各 グループ担 当 教 員 も積 極 的 に参 加 するこ とである。
- ・他 大 学 の先 生 の協 力 を得 た(当 時 はそれが可 能 だ った)。
- ・指 導 に当 たる教 員 間 で協 力 して解 決 した。

(G) カウンターパートとの 調 整

- ・カウ ンターパートに示 す予 算 と日 本 側 の財 源 の費 目 が整 合 しておらず、グレイゾーン が多い。グレイなまま実 施 すると、相 手 の期 待 感 との齟 齬 が生 まれると感 じ、使 える 総 額 と日 本 の会 計 システム上 必 要 な処 理、こ ち ら が希 望 するフ ィールドワークのアレン ジ等 を予 備 調 査 の時 点 で相 手 にすべ て説 明 した。
- ・協 定 校 側 が何 を望 んでいるか 国 によ っ て違 いが あり、一 般 化 できな かった。
- ・現 地 状 況 に関 する情 報 の事 前 収 集・プ ログ ラムの目 的 につい て、現 地 協 力 機 関 お よび現 地 政 府 の期 待 との差 。
- ・カウ ンターパートとの円 滑 な関 係 を心 が けた。
- ・カウ ンターパート大 学 の指 導 教 員 を事 前 に招 聘 して情 報 を共 有 したのがよ かった。
- ・調 査 地 及 び調 査 地 へ のル ー トの安 全 性 につい て心 配 したが、協 定 校 のア ドバ イス に 従 った。
- ・も とも と共 同 研 究 などを行 っ ている相 手 と一 緒 に実 施 するこ とが基 本 になる。
- ・調 査 対 象 国 では、地 方 政 府 と直 接 交 渉 できな いた め、協 力 して くれ る大 学 に任 せ たが、お も うよ うに い かな かった。
- ・事 前 に現 地 の情 報 を得 るた め に現 地 のコ ーディネーターと学 生 が直 接 連 絡 を取 る 手 段 があ ると良 い。
- ・言 語 につい ての懸 念 があ ったが、助 手 や現 地 の協 力 者 のお かげ で助 かった。

(H) グループワークへの対処

- ・グループ化する場合に課題の興味から離れた学生をどの様に指導していくか。グループとしての目的、役割を明確にして学生間のコミュニケーションを図れるように工夫する。
- ・「free-riderを許さない」という考えを周知した。
- ・グループ内の人間関係の構築。
- ・4～5つのワーキンググループを編成したが、参加人数に偏りが生じ、面接などで調整した(参加者の不満を完全に払拭できてはいないと思う)。

(I) 学生主体の調査デザインの提言

- ・事前の現地調査で整合的な課題、取り組み、コンテキストの把握と重要人物の特定をある程度行い、院生に informed decision, informed planning を実行させることに努めた。(1回目)現地のサイトをサイトロケーション別と、 이슈別 のクロスで調査させ、すべての院生に2つの視点から調査と報告書作成を課した。(2回目)調査受け入れサイトを20-30用意し、調査課題に応じて、サイトを組みあわせ、課題と解決策オプションの多様性を確保した。

(2) 本調査の最中

続いて、本調査最中に起きた困難な課題についての回答が、表5である。最も多かった回答は「健康や治安面でのリスク対策」、次に「グループワーク」であった。いったん本調査が始まった後ではリスク対策が再懸念事項であったことがわかる。自由記述の回答では、人間関係について指摘する回答が複数あった。

表5: 本調査の期間中、何が困難でしたか。(複数回答可)

(1) 健康や治安面でのリスク対策	25
(2) グループワークの指導	15
(3) カウンターパート(大学、現地政府など)との調整	11
(4) 移動・宿泊・支払などの調整	6
(5) その他	
人間関係の調整	教員間の不調和
外部資金を使い切ること	交通安全についての配慮
調査対象地の社会関係に与える影響	
自由時間の学生の安全	
名古屋大学での他業務に関する事務的なやりとり	

以上の課題について、どのように対処したか、あるいは留意点は何かについて問うた。その回答は以下のとおりである。概ね(A)教員・カウンターパートとの関係、(B)健康面での対応、(C)治安リスク対策、(D)グループワークの対応、(E)調査対象地の人間関係への配慮、といったものがあげられた。(A)~(D)については、毎年の課題だが、完全な対処法はないため、留意しながら取り組むほかないと思われる。

上記の困難な課題に対処するため、どう対処しましたか。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。(簡潔にお書きください)

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 教員・カウンターパートとの関係

- ・教員の協力。
- ・不和にある教員の一方を飲み連れ出し、気分転換を図った。
- ・現地でストレスを抱える教員の話をも個別に聞いたり、教員だけの食事会などを開き、ストレス発散の機会を設ける。
- ・委員長の時はあらかじめ、カウンターパートのしっかりした国をかなり強引に選んだ。当時は委員長が国を選ぶことができた。
- ・現地パートナーとの信頼関係で問題を解決していった。
- ・現地で交渉するほかない。
- ・カウンターパート大学の調整教員との信頼関係が重要である。
- ・常に関係者とのコミュニケーションを図ること。
- ・現地協力大学、および協力自治体、企業との綿密な連携と、これらとの関係の整理(gives and takes)を行ってから行動した。
- ・協定校の担当者と経費負担について対立が生じたが、数日後無事解決し、学生の調査には支障はなかった。
- ・事前調査と本調査の間に、予備調査を設け、カウンターパートによる準備等を確認することが大切である。

(B) 健康面での対応

- ・予防接種の励行と救急法の会得。
- ・現地不適応学生のケア。
- ・宿舎から遠い調査地の場合は、近くに診療所があるかどうかを確認した。
- ・体調管理、盗難防止等は口を酸っぱくしていうしか思いつかない。
- ・健康面については病院等の情報収集。

- ・誰かが病気になると、病院に連れていく教員がでてしまい、安全に気を配り、また指導をする教員が一人減ってしまう。体調的に無理をさせないようにした。
- ・約3名の学生がおなかを壊し、帰国便に乗れるかがぎりぎりの状態になり、空港内の救急医療室に連れて行き、点滴による治療を受けさせた。学生には体調管理のため薬を持参するよう、事前に言っていたが、3名の学生はいずれも持参していなかった。学生の危機管理能力について事前にもっと説明する必要がある。
- ・下痢や発熱の学生をホテルにおいて調査に出かけてよいものか心配した。対応としては、予定外の回数ホテルに戻る必要があった。
- ・デング熱・下痢対策。
- ・病人が発生し、現地病院から薬をもらった。

(C)治安・リスク対策

- ・現地大使館への連絡。
- ・資金の安全な移動方法の検討(支払)。
- ・グループリーダーを中心にリスク対策を共有していたので、大きなことはなかった。
- ・人里離れた大学構内での宿泊で、準備で多忙だったこともあって、夜の外出を控えたのが最大のリスク対策だった。
- ・治安面は学生への注意喚起。
- ・最終日の自由時間に学生1名が門限を大幅に遅れしかも意識がもうろうとした状態でホテルに戻ってきた。知らない人の家について行って薬か何か飲まされたようで、一つ間違えば大変なことになっていた。
- ・道路の横断に慎重を期した。

(D)グループワークの対応

- ・日本人と留学生の共同促進作業の指導。
- ・誰もが自主的に関われるようグループ内の役割分担に配慮した。
- ・グループワークの指導は、学生自身が主体的に考えられるように支援することが大切であった(必ずしも、そうならなかったが)。
- ・立ち入りすぎて、学生の自らの学びの機会を奪うことがないようにした。
- ・グループワークで当初予定にない調査先への訪問希望が出たが、カウンターパートとの調整が難しく、希望はかなえられなかった。

(E)調査対象地の人間関係への配慮

- ・(調査対象地の人間関係への悪影響が懸念される場合)調査対象者間で情報を間接的に漏洩させてしまうことがないように注意した。

(3) 本調査の後

最後に、本調査後の課題点について尋ねた。そのまとめが表6である。問題は報告書の作成に集中している。他方で、カウンターパートとの連携、残されていた本来業務への対応といった点もあげられた。

表6: 本調査からの帰国後、何が困難でしたか。(複数回答可)

(1) レポート執筆の指導	24
(2) グループワークの指導	12
(3) 最終発表会のための指導	6
(4) 決算書の作成	2
(5) その他	
・カウンターパート側が日本で実施するOFWの受け入れをしたこと。	
・2週間職場をあけたことによる本来業務への対応。	
・カウンターパートとの連携の維持。	

上記の課題についての対処法、留意点についての回答が以下のとおりである。概ね、(A)グループワークについて、(B)レポート執筆について、(C)カウンターパートとの関係維持、(D)本来業務への復帰、(E)決算書の作成、といった回答があった。具体的には以下を参照されたい。

上記の困難な課題に対処するため、どう対処しましたか。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。(簡潔にお書きください)

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A)グループワークについて

- ・グループワークでのトラブルは毎年必ず起きる。また、調査から帰った後は学生のモチベーションが下がって、レポート作成が一部の学生の負担になるケースも少なくない。
- ・学生の執筆能力には差があるので完全に均等にするのは難しい。
- ・英語能力は、学生によって大きく異なっていた。
- ・一人に負担と役割が集中しないようにし、一人ひとりが主体的に関わって満足できるようにするためのモラル・サポートを心がけた。
- ・各グループのリーダーに過度な負担がかからないよう、チームで仕事をするように指導しました。
- ・グループのリーダーを通じて、グループワークを実施させ、リーダーからの報告を受けつつ、執筆のモニタリングをした。

- ・現地の状況を把握（して報告）するための基本的な情報は何かを、事前に考えさせることが必要。
- ・ある程度専門的な知識を持った教員が、レポート執筆の指導に当たる。
- ・個人レポートとグループレポートそれぞれの利点、欠点の洗い出し。
- ・辛抱強く指導する他ない。
- ・個別指導を行う。
- ・早い時期に作業を始めること。
- ・当然英語による発表だが、皆驚くほどよくまとめ、素晴らしい発表となった。GSIDのすべての教員、院生、スポンサーに参加して貰いたかった。

(B)レポート執筆について

- ・レポート執筆指導は特に困難ではなかったが、時間がとられた。
- ・言語もふくめて添削指導する時間がない。
- ・帰国後の作業をすべて、簡素化すべき（内容の質に応じた時間の費やし方）。時間と費用の節約という考えから、ほとんど誰も読まないレポートの作成には無駄が多い。

(C)カウンターパートとの関係維持

- ・調査が終わってからも、そのとき、世話になったカウンターパートの学生の人々とは、できるだけ、コンタクトを維持できると良い。

(D)本来業務への復帰

- ・現地で予定を詰め込みすぎないようにし、1, 2日ごとに職場メールのチェックができることが望ましい。

(E)決算書の作成

- ・決算書作成のルールが不明確。

以上より、本調査の前および出発直前には対処すべきことが多く、本調査中はリスク対策と人間関係が主な課題であり、本調査後はレポート執筆に向けた作業が主な課題であったことがわかる。他方で、指摘された対処法・留意点は多様かつ実践的で役に立つものであるが、OFWに参加する際の素地が異なりうることから、どのような対処法が望ましいかは一元的ではないように思われる。その時々状況に合わせてながら、経験蓄積・伝達によって事前準備段階で不安や問題を解消していくことが、今後も望ましいと言えるだろう。

6. 運営側にとっての意義

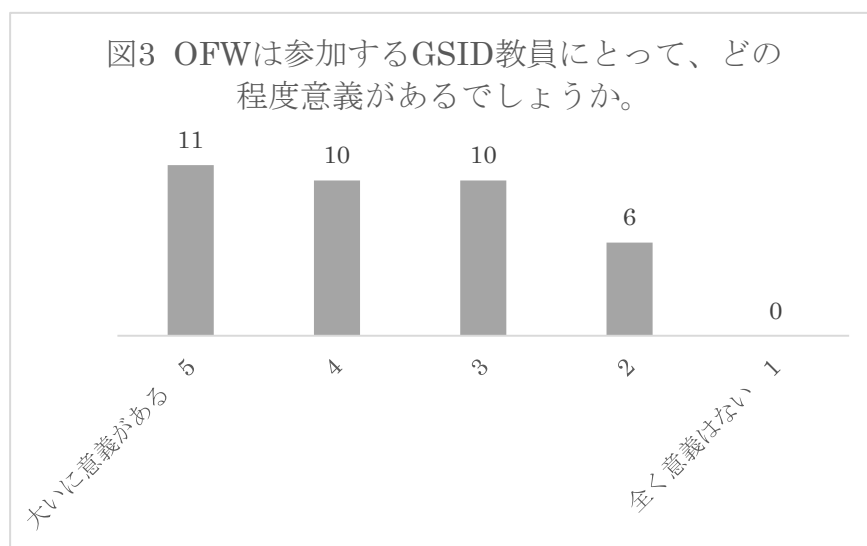
次に、OFWを実施することが、GSID教員、カウンターパート大学や

その教員、ならびに現地の政府や人々にどれくらい意義があるかを尋ねた。OFWは教育プログラムであるため、主たる受益者として想定されているのはGSIDの参加学生だろう。しかし、それと同時に、何らかの形で運営側の関係者にも意義を与えてきた可能性はある。

そこで、GSID教員、カウンターパート大学やその教員、現地の政府や人々のそれぞれについて、意義の程度を「5 大いに意義がある」から「1 全く意義はない」までの5段階尺度で質問した。その上で、選択の理由について自由記述で尋ねた。

(1) GSID 教員にとって

図3は、GSID教員にとっての意義を尋ねた結果である。過半数がある程度の意義を認めていることがわかる（5か4を選択した回答者が37名中21名）。



上記の回答について、理由を尋ねた。以下はその詳細である。概ね、(A)意義がある、(B)意義が（あまり）ない、(C)欠点と利点がある、(D)意義はあるが改善の余地あり、(E)判断が難しい、といった回答があった。意義を認める理由には教育的意義や研究者としての意義が指摘されている一方、意義が（あまり）ないとする理由には負担の大きさや研究者のスタイル、取り組み方などがあげられた。これらの両面をともに挙げた回答者もいた。また、意義を感じるための課題もあげられている。

そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A)意義がある

- ・教員も学生も能力を向上させることができる。
- ・学生のことをよく知ることができる。
- ・教室内ではわからない学生の姿が見えるし、グループを指導する経験ともなる。
- ・学生の現地調査能力と利害関係の調整能力などについて、GSIDの学生の現状がわかる。
- ・OFWは多くの参加学生にとって、初めての本格的にフィールドワーク調査である。開発を教えるには、開発現場を見るのは一番重要である。
- ・現場ごとに新しい発見がある。
- ・現場を踏まえての指導をすることで、国際協力を経験的に学ばせることができる。
- ・教育的な意義がある。院生の直接的な学習の場に立ち会い、教える(学び合いの)機会が与えられることは、教員として有り難いことと思う。院生や同僚、提携大学の教員や学生をよく知る機会にもなる。
- ・授業だけではわからない学生のいろいろな面を知ることになる。
- ・学生にとって財産ともいえる重要な学習機会であり、それをサポートするのは教員としての重要な業務である。
- ・教員にとっても、Multi-Disciplinaryの勉強になる。
- ・ほかの委員会の仕事と同じように仕事だと考えていた。最初に委員長をしたころは、現在と異なり教員間でもOFWをGSIDの目玉とする意識は高く(研究科長が空港まで見送りに来た)、委員長をしてやっと一人前の教員とみられるような空気もあった。ただしひとりでは行けない中国の奥地やタイの農村部にある程度まとまった日数滞在できたのは研究者としてプラスだったと思う。
- ・国際的なネットワークの強化につながると思う。
- ・訪問先が自分の研究に関係する場合、ネットワークづくりに役立つ。
- ・専門外のため適切な判断はできかねるが、個人的には未知の経験で大いに勉強になった。
- ・協業のなかでの自らの交渉能力の向上、学生の成長などが期待できる。
- ・この種の調査等への経験の有無、研究での専門との関係などで、個人間で差が大きいと思うが、少なくとも個人的には、これに参加しなければ得られない、非常に得難い経験が出来た。
- ・開発の現場では新たな問題に直面することが多く、それに対処することは教員の力量形成にとっても重要な意義がある。

- ・開発というものの多様性を理解する。
- ・GSID および開発調査の縮図を運営者として観ることとなる。

(B)意義が(あまり)ない

- ・教育効果のみ。
- ・参加するというよりも添乗員か引率者の立場なので、旅行会社で必要なスキルが身に付くかもしれないが、そのスキルが不要な教員にはあまり意義がないと感じた。
- ・業務なので、意義が必要なかどうか分からないが、9月から10月初旬の秋学期前の貴重な2週間を取られるのは厳しい。当該国が研究対象の教員であれば、行くことそのものに意義があるかと思うが、当方はそのケースではなかった。
- ・恒常的に様々な締切に追われているなかで、2週間のタイムロスはきつい。
- ・専門に近い人には意義があるかもしれないが、そうでない人にはあまりない。
- ・私自身フィールドに出る人間だが、個人調査が主体で、集団で行動することはないので、OFW にあまり意義を感じない。
- ・ついていっているだけ。(レポート作成に関与するとか)主体的に参加していない。

(C)利点と欠点がある

- ・教員にとって直接的なメリットのない仕事に膨大なエネルギーを注がなければならず、本来の授業の補講などの負担も増えるため全く割に合わない役回りとも言えるが、その一方で一生に一度きりの貴重な人生経験ができたとも思える。
- ・参加する教員にとっては負担が大きい。しかしこれを機会に、一人では集められない種類の現地情報を集められる利点はある。

(D)意義はあるが改善の余地あり

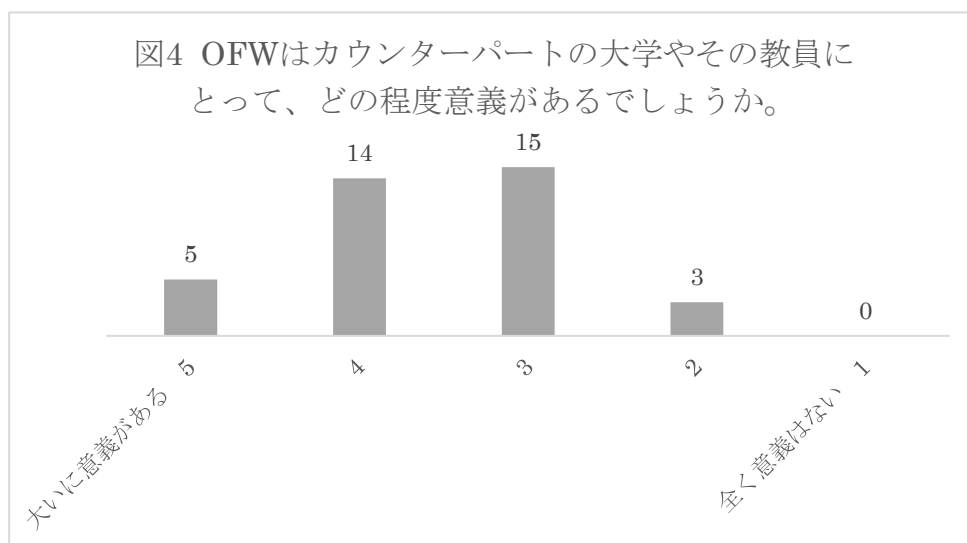
- ・現場で学生と一緒に開発問題を直視できる。しかし、生きた教材を用いて、実践的に指導できるという利点が認識されていないので、程度が2に留まっている。
- ・OFW は GDID の「目玉」プロジェクトであり、開発学カリキュラムも海外でのインターンシップがより重視されてきている。「費用対効果」の面から GSID 内部からの批判もあったが、対象地域を分散してスポンサーを募り、もっと柔軟に実施するなどして、改善の余地はある。

(E)判断が難しい

- ・専門分野ではないので、判断しにくい。

(2) カウンターパート大学やその教員にとって

次に、カウンターパート大学やその教員にとっての意義を尋ねた。図4のとおり、全く意義はないとの回答はなかったが、多くの回答は4と3に集中した。



上記の回答についての理由を尋ねた結果が、以下のとおりである。概ね、(A)交流・ネットワーク、(B)負担の大きさ、(C)謝礼の提供、(D)交流促進・OFWの波及、(E)交流の不十分さ、(F)場合によりけり、(G)カウンターパートに聞くべき、といった点に分類できるだろう。交流が盛んになることと負担の大きさは頻繁に挙げられている。負担の大きさに対しては対価の提供が指摘されているが、より積極的にOFWという教育プログラムの波及を提言する回答もあった。また、交流の質についての疑問や、それを補う上での条件を指摘した回答もあった。

そもそもカウンターパートに尋ねるべきという指摘はもっともだが、今回は現実的に行うキャパシティが欠けていたため、割愛せざるをえなかった。今後の課題である。具体的には以下を参照されたい。

そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 交流・ネットワーク

- ・外国組織との共同作業の経験は、教育研究活動の幅を広げるという意味ではプラスだと考える。
- ・研究交流が維持できる。
- ・先方にとっても、国際的なネットワークの強化につながると思う。
- ・自国の開発問題を、日本の教員や多様な国籍の院生とともに、外部者の視点からとらえなおすことができる。

- ・先方の大学生や教員にとって日本の学生との交流はそれなりに意味があると思う。
- ・異なる文化に属する機関との協働経験をつむことができる。
- ・サポートに入る学生などに調査手法を間接的に学ぶ、国際交流ができる等のメリットがある。
- ・交流協定を結んでいる大学の教員同士が親しくなるのは大いに結構なことだ。

(B)負担の大きさ

- ・途上国での調整は基本的にカウンターパート大学の教員に依存している。彼らがいないと、本学教員が担当する必要がある、現実的に負担が大きすぎる。
- ・GSID側と行動を共にすることによって友好関係には意義があるかもしれないが、カウンターパート側には負担をかけている側面は否定できない。
- ・経済的メリットが一人の教員に集中するので、カウンターパート内の政治の原因ともなりうる。また、学期中だと先方への負担が大きいと思う。
- ・我々が先方の大学や教員に対して行うサポートよりも、先方の大学や教員が我々に対して行ってくれるサポートの方がずっと大きいと思われる。
- ・相手にとってどれだけメリットがあるか疑問です。少なくとも参加した国では、ご迷惑をかけただけのような気がする。

(C)謝礼の提供

- ・当該国やカウンターパートの大学と連携することが、研究や教育に直結する教員にとっては、研究科の資金でカウンターパートを客員研究員として招聘したり、謝礼金を渡すことができるので、遣り甲斐があるかと思う。
- ・迷惑をかける量が多いが、それなりの対価も渡している。また全体的な交流の中の一つとなる。
- ・先方にも負担が大きいと思う。関係教員にとっては、外国人客員研究員で招聘されるのが大きなインセンティブになっているのではないか。

(D)交流促進、OFWの波及

- ・経済的なメリットはいくらかはあるが、それ以上にGSIDの学生の能力レベルとGSIDの教育内容について理解が進むため、学術交流協定に基づいてその大学出身の学生をGSIDに出願してもらう際の参考資料が提供される。
- ・カウンターパートの大学とは事前に交流協定を締結し、相互に教員・学生の交流実績があることがOFWの意義を共有する前提となる。OFWを相互に実施することを提案したこともある。アジアの躍進はめざましく、日本における「開発軌跡・経験」を相互に学習する逆OFWもあってもよいのではないか。
- ・似たようなプログラムを導入したタイの例のように、OFWの教育的意義が伝わっている。

(E) 交流の不十分さ

・外国人である教員や学生と交流できるという利点のみ。本調査前後の交流等が全くなく、初対面ですぐ本調査を行うことを間違っていると感じていない。

(F) 場合によりけり

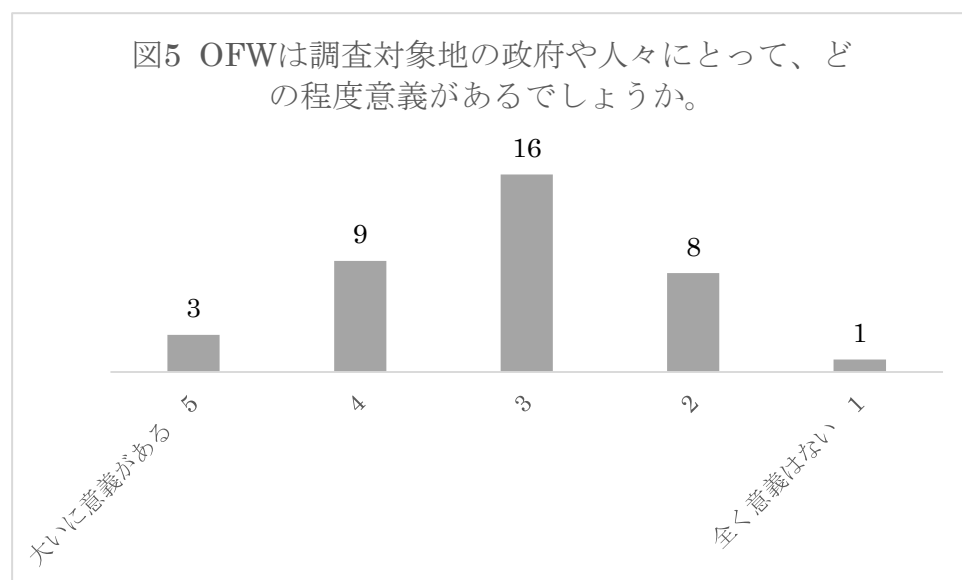
- ・これも、ケースバイケースで、相手の事情によりかなり左右されると思う。
- ・意義があるかないかは、どのように相手校が現地の学生を参加させるかに依存する。
- ・目的が一致しない場合には教員の負担となる。
- ・協力参加大学やカウンターパートに異議を見いだして頂くには、かなりこちら側のエネルギーやリソースのインプットが必要になる。政策提言等に結びつけるには相当なコミットメントが必要となり、教員負担は多大である。

(G) カウンターパートに聞くべき

- ・この点は、カウンターパートの側にアンケートをとる必要がある。
- ・カウンターパートの大学やその教員とあまり話していないのでわからない。

(3) 調査対象地の人々にとって

最後に、調査対象地の人々にとっての意義を尋ねた。図5のとおり、「大いに意義がある」「全く意義はない」との回答も少数だが存在した。上記2つの問いと比べて、より多くの回答者が3を選んでいる。



以上の選択をした理由についての回答は、以下のとおりである。(A)意義は（あまり）ない、(B)意義はある、(C)状況次第、という3つに分類

できるだろう。意義が（あまり）ないとの理由には、一度きり短期間の調査に限界を認める回答が多いが、調査地へのフィードバックのように要改善点を指摘する声もある。他方で意義を認める理由としては、提案を行うことや交流といったものがあげられていた。

そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。

（※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。）

（A）意義は（あまり）ない

- ・ケース・バイ・ケースだが、調査が終わってから調査対象地にほとんどフィードバックがないと思われる。
- ・その後のフォローアップ調査等を行われていないため、意義があったのか確認できない。
- ・調査対象地の政府や人々に影響を与えるような調査結果を出すことを目的としていない（ように見える）。
- ・学生の報告会等での提言自体が役に立つということはあまりないだろう。
- ・短期間の、調査対象地をよく知らない人間の調査結果が役に立つとは思えない。
- ・海外からのゲストを受け入れるということで、地方政府が住民に権力を誇示することに役立つだろうが、アカデミックな知見で貢献するのは容易ではない。
- ・2週間の滞在で発展に寄与できる提言は得られない。
- ・ここが OFW の課題であると思う。調査対象地の人々にとって、国際交流という点では意義があるが、開発問題を再考する、改善を図るという点での意義は、残念ながら少ない。
- ・GSID 学生からのフィードバックの質により、意義の程度は変化する。ある時は、村の人達に彼らに何をしてくれるのかと問い詰められたことがあった。なるべく生活の邪魔をしないように、また良いフィードバックができるように頑張ることが必要。
- ・いずれのときも実習中は仕事の邪魔をしているような感触を持った。帰国後村長に対価を要求されたが（日本に来たい）実行することはできなかった。
- ・どうしても一回限りの訪問になりがちであるため、なかなか地元へのフィードバックなどが難しい。
- ・OFW は基本的に学生のものであり、限界がある。多くを望んではいけない。
- ・学生による調査は、社会に還元できるものを何も生まない。逆に、地元の人、地元の組織には迷惑をかけて調査を行っていることの自覚を促すべき。
- ・率直に言って、短期的、直接的な面では、なかなか難しいと思う。
- ・2週間きたお客さんから、現地の課題解決に対し多くを期待するのは無理がある。

・学生が短期間で行った調査による政策提案は必ずしも現地の状況に合致しているとは限らない。

(B)意義はある

・多数でアイデアを出し合い、現地の課題解決の提案をすることは、それを採用するしないにかかわらず、現地にとって参考になるだろう。

・外部者が来ること自体が、自治体の活性化に貢献するという考えもあるかと思う。

・学生が研修の成果を現地の住民や政府関係者に対して現地で発表することにより、調査対象地域への貢献と交流が可能になる。

・ある程度の意義がある。対象地域も海外に自らをPRしたいとする意欲があり、また人的交流による地域の活性化につながっているとする認識があったと思う。むしろ調査方法が現地に喜んで受け入れられるものであることが重要。

・日本からの客はこんなことに興味があるのかとある程度理解できる。提言はたまになるほどというものがある。

・現地政府や人々の需要に合った研究をするのであれば意義がある。

・国際交流としては有意義だと思う。

・受入側にとっては、おそらく負担のほうが大きいであろうが、それに取り組む中での学びも少なからずあるのではないかと思う。

・異なる文化に属する機関との協働経験をつむことができる。

(C)状況次第

・その地域の状況によると思うのでわからない。

7. OFW の今後

最後の問いとして、OFW の今後について自由記述で尋ねた。概ね、(A)継続、(B)継続＋改善、(C)抜本的見直し、(D)実施方法についての懸念・提言、(E)担当教員の裁量、(F)負担軽減・外注の検討、(G)教員間の負担の公平化、といった回答があった。具体的には以下を参照されたい。

OFW は今後、どのように運営されるのがよいとお考えでしょうか。その理由とともに、ご意見をお聞かせください。

(※以下の中には、その意味を全く損ねることなく、調査者が表現を一部修正したものがある。)

(A) 継続

- ・さらに活発に行って欲しい。このような機会は、GSID でこそ得られるものだから。
- ・引き続き継続することは学生、教員、現地の関係者にとってとても有意義である。また NGO の専門家等との連携、事前、事後の研修に更に力をいれることにより、更に学びや経験が深まると考える。
- ・今までのままで構わない。ただ学生がより主体的に関われる仕組みが出来たほうがいい。
- ・継続して実施してください。続けることはそんなに簡単ではない。
- ・GSID のセールスポイントの一つであることは間違いないので、多少、形は変えてでも、継続されるのがよいと思う。
- ・継続実施を望みたい。

(B) 継続 + 改善

- ・GSID の卒業生の開発現場での活躍を見ると、OFW の経験が大変役に立っていることがわかる。予算上の問題はあがあるが、何とか続けられたら良い。ただ、現在ではあちこちの大学の開発関連ゼミで海外研修旅行に出かけるようになっているので、それとの差別化により一層プロフェッショナルなフィールドワークにしたらよい。GSID の OFW の特徴は多様な国の学生が参加していることなので、この点も生かしたらよい。運営方法については、現在の GSID の先生方の専門性を生かすように工夫されたい。
- ・GSID の強みは各自の専門分野だけでなく、途上国の開発問題を学際的にとらえ、学ぶことができる点にあると思う。OFW は、それを具現化する GSID の魅力の一つでもあるので、今後も積極的に進めていくべきと考える。一方で、在学中に専門分野をどれ程深められるのかということ、その点には課題が残る。時間的な制約はあるが、OFW でも学際的に開発問題を学ぶことと、各自の専門性を深めることの2つの側面が達成されることが望ましい。
- ・OFW 実施対象国と調査地をある程度計画的に設定し、カウンターパート大学と調整する。カウンターパート大学もある程度調査地との関係を築ける。その結果、運営面はもちろん、テーマ設定もスムーズに行われるのではないかとと思われる。
- ・運営方法が相当変わっていると推測されるが、OFW は GSID の目玉であり、今後ますます進化を目指して欲しい。その際、教員の過度の負担が問題になるが、これは解決できるはず。東アジアや ASEAN の大学と共同で実施する方法もあり。この地域には、GSID の卒業生も多く、彼らのネットワークを活用することもできる。

・その年限りでなく、二年後、あるいは五年後に、調査地がどう変化し、発展したかを追跡するとよい。

(C)抜本的見直し

・GSID設置の趣旨(文科省提出のもの)、学生の属性の変化(留学生比率の増加)、アジア諸国の発展段階の変化を踏まえ、継続の可否も含め、抜本的見直しが必要である。現状は、変化に適応していない前例踏襲に感じる。同時に、教員の負担軽減、効率化も検討すべきである。

・受け入れ側の大学などの機関の実施する「農村調査実習」などに相乗りする形が良いと思う。ただしその前に、GSID学生の中の新卒日本人が減り途上国の役人や教員が増えた今、OFWの目的などの理念の見直しが必要と思われる。

(D)実施方法についての懸念・提言

・発展途上国でのフィールドワークは、普通に行えば例えば濃密な人間関係や賄賂や役人の壁や病気などに翻弄されるものだと思うので、それらが予め排除された環境で実地研修を行ってもあまりフィールドワークの練習にはならないかもしれないと思った。そうであれば、治安や衛生状態の良い国でOFWを行い、ただし、GSIDや相手国の大学などのサポート(取材相手との接触、宿泊所の確保、等々)を最低限にする、というのも一つのやり方かと思う。

・資金繰りに今後苦勞しそうなので、それに制約される部分が大きと思う。参加学生・教員数とも少なくする必要があるかもしれない。よい助教の確保は今後とも必須。

・教員が十数名という多くの学生集団を引率するという体制から、たとえば博士課程の学生が修士課程の学生を3-6名程度引率して研修を実施するようなしくみにしてはどうか。研修テーマは、引率学生の研究テーマに近いものとし、また修士の学生も修士論文のテーマと直接関係のあるテーマのOFWに参加することとする。GSIDの引率者がいないことで、大学の責任が問われる可能性があるため、パートナー大学の教員に監督責任を負ってもらう方式があろう。

・開発の専門家による専門的な指導のある調査が理想(今の陣容と忙しさでは、無理だろう)。

・なるべく専門的な知識を持った教員が中心になって学生の指導に当たるべきである。私は全く専門外であるにもかかわらず、事前調査から帰国後のレポートの指導まで全てを行ったが、学生に満足のいくサポートができたとは到底言い難い。

- ・途上国の現状だから仕方ないというのではなく、多少とも出費がかかろうとも、安全管理には十二分の配慮が必要。
- ・個人ベースで調査に出るのがよい、そのための支援に資金をだせる制度をつくる。
- ・参加が1度のみであり、その後の展開をよく把握していないので、うまく答えられないが、参加後の報告書では、回答者の専門的視点と手法の重要性に関して、以下の点を記した。「問題設定を明確にし、高いレベルの成果をめざすことと、人類学で重視されるような現場において自らの問題を発見することの両立は困難。しかしながら、テーマによっては、現場を感じながら、枠組みにとらわれず自由に問題をみつけるような学びをとりいれることが重要である。そのため、ホームステイなどを重視するような方法を取りいれてもよいのではないか。課題解決型と問題発見型のバランスが重要なのではないか。
- ・教員が興味を持っている課題を取り上げることも重要である。

(E)担当教員の裁量

- ・その年の担当の教員の自由裁量でよい。

(F)負担軽減・外注の検討

- ・教員の負担をなるべく軽減するために、外注も可能であれば検討。
- ・一部でも外部に業務を委託し、省力化できると良い。今のままでは OFW 委員の負担が大きく、また決まった教員だけがこの負担を担っているように思う。ただし、自発的にやる気のある教員がいれば、例年のやり方にこだわらず、その人の裁量で、新しいテーマや試みをドンドン導入するのはありだと思う。
- ・一部の教員に負担が過度に偏らないような仕組みが必要。ただ、向き不向きのある仕事なので、OFW 委員には他の業務面での配慮が必要だと思う。
- ・最近では海外実習がどの大学でも取り入れており、重要性を増している。しかしながら、担当の教員の負担は増えているかと思う。担当者の負担を軽減する方策をとらなければならないと考える。
- ・制約要因を少なくできるように、小規模、参加者負担の原則、目的の簡素化によって、適切かつ能力のある教員が指導に当たるべき。

(G)教員間の負担の公平化

- ・構成教員が皆、順に責任を負って OFW を運営する体制。大変な熱意と労力を要する仕事だと思うが、これを避け続けている教員もあり、不公平なところもある。最近では、調査期間も短くなり、調査目的や達成目標の設定もより軽いものに変化しつつあると思う。上記が担保されれば、皆、順に熱意を持って取り組むときに1、2度あれば、OFW の質を担保することはできるので

はないかと思う。調査に出かける前と比べて帰る頃には参加院生が皆、たくましく見えるようになり、今後の研究にもよりクリアな問題意識を持つようになった。そのような面々を見ていると、OFWにかかわる教員の苦労は決して無駄ではないと思う。

IV. クロス分析：属性が評価に与える影響

本調査の質問項目には、回答者の属性を尋ねたもの（III. 3）と、OFWの目的達成度、意義、今後の提言について尋ねたもの（III. 4～7）がある。個々の回答はそれ自体として興味深い評価や提言を含むものだが、教員の持っていた特定の属性が評価に影響を与えた可能性もある。しかし、上記のまとめでは、属性による区分は簡素化のためにあえてしていない。

そこで最後に、属性ごとに何らかの傾向が見られるかを確かめることにする。なお紙幅の関係上、一貫した傾向が見られたものだけを示し、それ以外は割愛する。一貫した傾向が見られたのは、「小集団での調査経験」という属性のみである²。

図 6～11 は、数値化された 4 つの目的の達成度と 3 つの意義について、小集団での調査経験の有無に分けて示したものである。一見してわかるとおり、小集団での調査経験が有ると答えた回答者は、目的の達成度をより高く評価し、GSID 教員、カウンターパート、現地政府や人々にとっての意義もより高く評価する傾向にある。他の属性があまり明確な傾向を示さない中、この属性だけは一貫した傾向を示している。

² 他の属性と達成度や意義についての質問項目についてもすべてクロスさせて調べたが、一貫した傾向は見られなかった。特定の調査地や参加回数といった属性はいくつかの質問項目で違いを示したが、他の類似した質問項目では違いが見られないという矛盾した結果があったため、特定の年の調査あるいは特定の回答者がもつ傾向の反映に過ぎないのであって、何らかの属性が及ぼす体系的な効果とは考え難い。他方で、2 つ以上の属性を取り入れた分析については、サンプルサイズが 37 と少なすぎるため、意味がないと判断した。

図6 小集団での調査経験とOFW目的の達成度：
途上国課題の理解

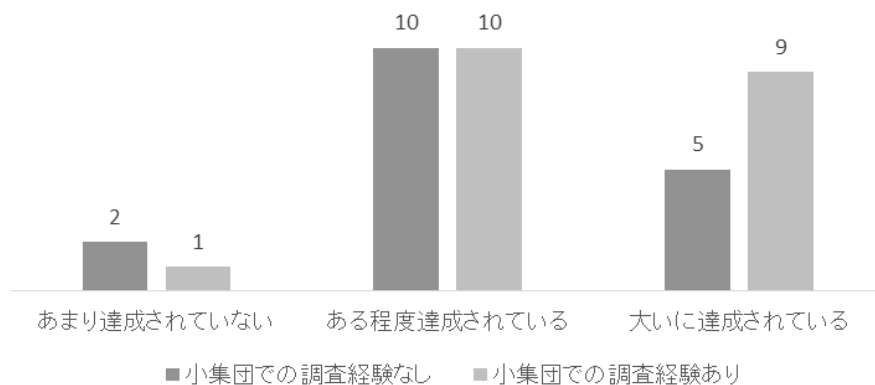


図7 小集団での調査経験とOFW目的の達成度：
フィールドワークスキルの習得

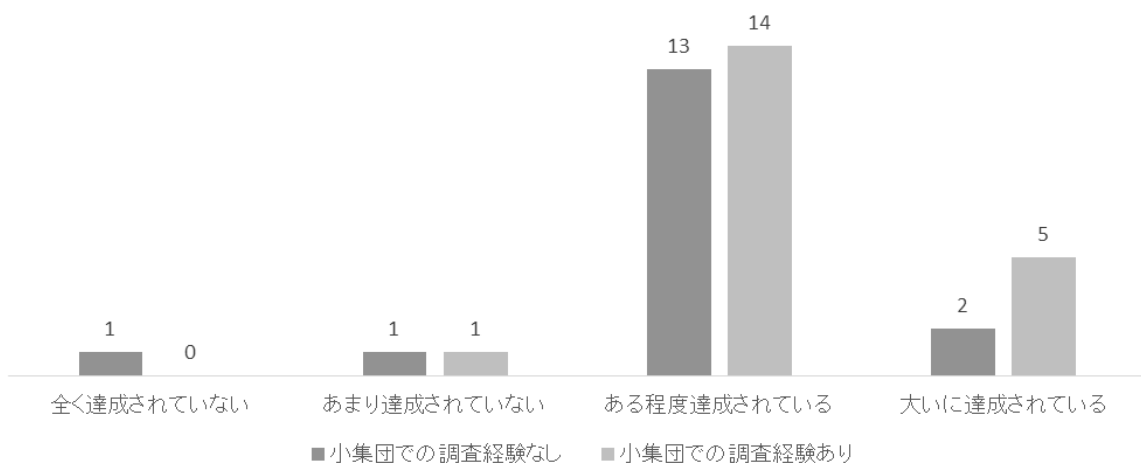


図8 小集団での調査経験とOFW目的の達成度：
利害調整・問題解決能力

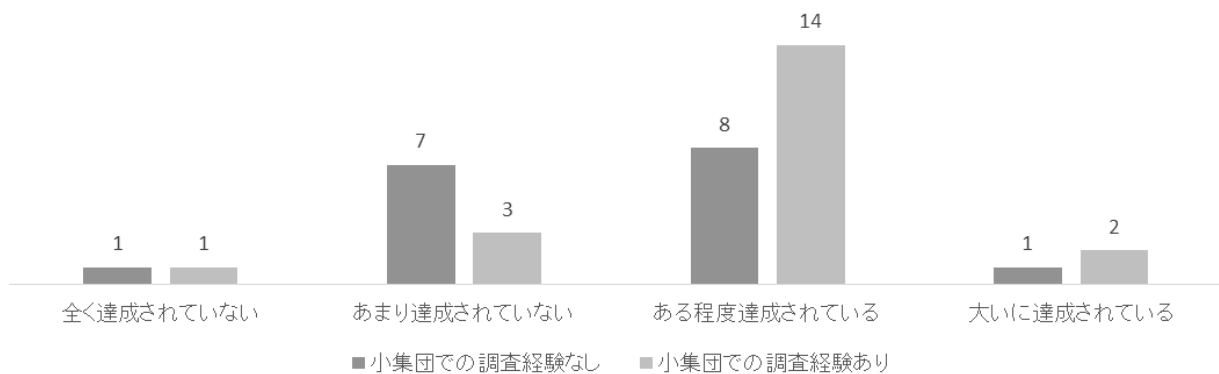


図9 小集団での調査経験とOFW目的の達成度：
多様な参加者との調整能力

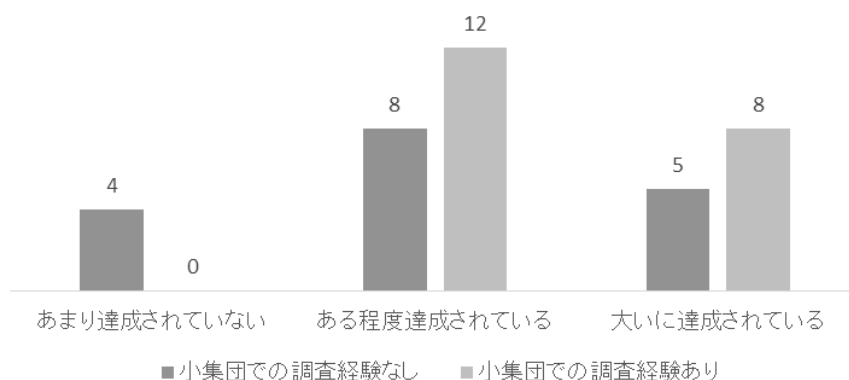


図10 小集団での調査経験と意義認識：
GSID教員にとって

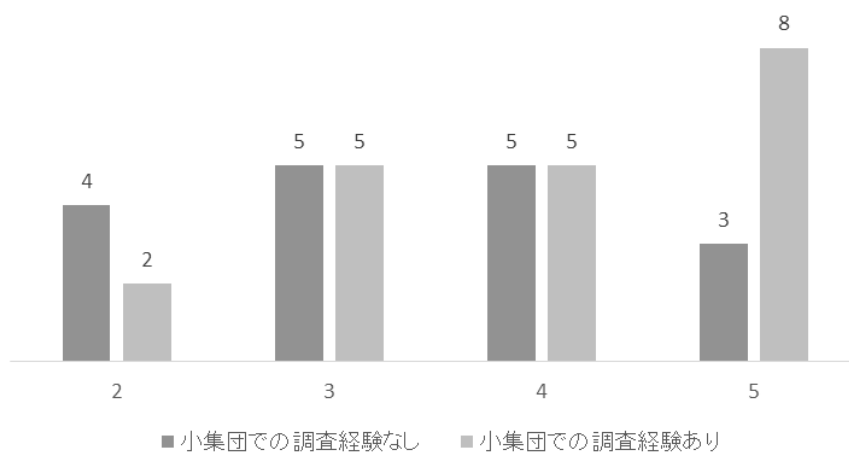


図11 小集団での調査経験と意義認識：
カウンターパート大学(教員、学生)にとって

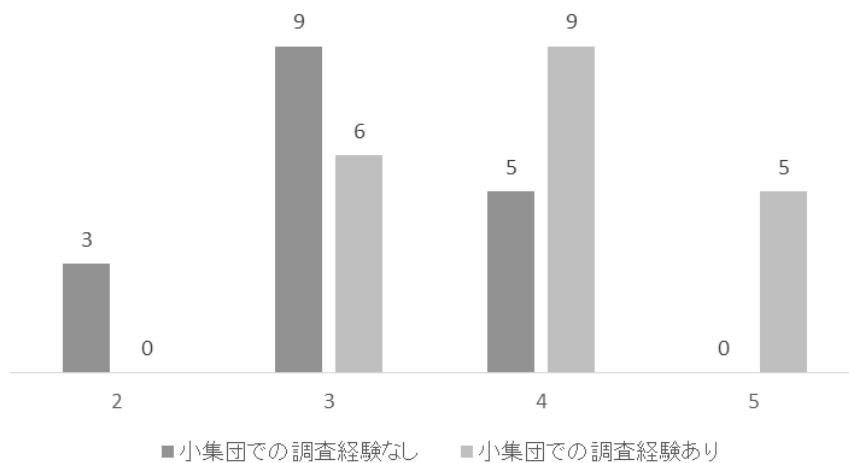
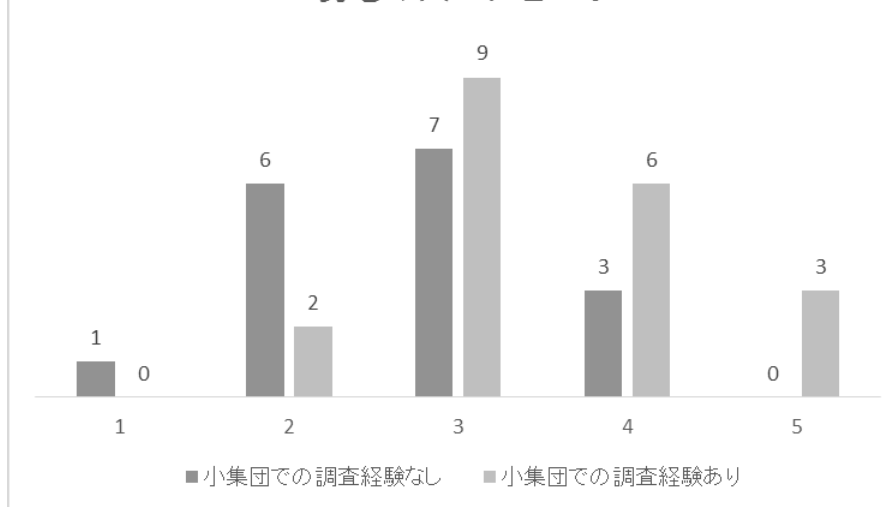


図12 小集団での調査経験と意義認識：
現地の人々にとって



小集団での調査経験があると、なぜ目的達成度や意義を比較的高く評価する傾向があるのだろうか。これについては次のように解釈できると思われる。例えば OFW の目的は一般的なものだが、人間関係や調査地といった年毎の要素によって達成度の評価は異なりうる。参加学生に対する教育効果にしても、毎回の OFW での成長や学びはあるだろうが、それがどの程度インパクトをもったかを全体として評価することは難しい。また、関係者それぞれにとっての意義も、直ちに如実に表れるものとは言い難いだろう。いわばそれぞれの参加教員にとっての経験は一期一会のものであり、たとえ回答の上で何らかの評価尺度を持ち込んだとしても、それは個々の教員にしかあずかり知らないものである³。そうした中、類似の小集団での調査経験は、OFW の評価を行う上での有効な参照点になったのではないだろうか。

もちろん、そうした参照点があったとしても、バラバラな評価になりうる可能性はあった。また評価が肯定的にも否定的にも偏る可能性もあった。しかし結果として、小集団での調査経験が有った回答者は、他の回答者と比べて、相対的に目的達成度が高く、意義があると答える傾向が高かった。この一貫した回答傾向には 2 つの可能性がある。第 1 の可能性として、OFW は類似の小集団での社会調査と比べて、比較的優れていたことを示唆しているかもしれない。あるいは第 2 の可能性として、

³ 調査者は、OFW の目的達成度や意義を評価する試みはなく、本調査での個々の回答も特別な事前知識や想定を抱くことなく独立して回答されたと考えている。

小集団での調査経験がある回答者は、OFWを比較的肯定的に（厳しくない視点で）みていたのかもしれない⁴。

V. おわりに

本報告書は、2016年度までにOFWに参加した37名の教員に対するアンケートの結果を報告したものである。前節まで、回答者の属性、OFWの目的達成度についての評価、異議の評価、OFWの今後のあり方といった点について、アンケートへの回答内容をまとめた。それぞれの回答は多様であり、関係教員の生の声が反映されたもので、実に示唆に富むものであった。ここでそれらをまとめることは難しいので、具体的にはそれぞれの箇所をご覧いただきたい。

最後に、調査者としての感想を若干述べることにしたい。調査者は、OFWを何らかの形で評価し、その良い点と良くない点を確認することには大きな意義があると考ええる。しかし、評価は容易ではない。OFWが一貫した4つの目的をもちながら、しかし実施については各年のOFW委員の裁量に多くを任されてきたことが評価を難しくしている。

いずれにしても、このような自由に満ちたOFWの特性は豊富な知見をもたらしてくれているし、知見の蓄積は、特定の国や年のOFWの経験を客観的に見直すうえで有益である。本調査では、個々の回答を出来る限り忠実に報告するとともに、回答者の属性と回答内容を照らし合わせることで、一定の見取り図を示すことを試みた。このような試みが成功しているかは定かでないが、過去25回のOFWの経験が何らかの形で今後も生かされるようであれば幸いである。

この試みには、GSIDの現教員のおよそ半数が参加し、それ以外にも過去にGSIDに所属した教員の皆様のご協力をいただいた。そのような性格から、この報告書は、OFWの今後を考える上で、長大な引継ぎ文書のような価値をもっているかもしれない。

繰り返しになるが、調査者としては本報告書がOFWの今後を確定するものとは考えていない。その理由は、アンケートでは個々の回答者が独立した形で回答することが保証されており、回答者の間での議論は行

⁴ この分析についての留意点を2つ述べたい。第1に、本調査の回答では、図らずも小集団での調査経験を持つ回答者と持たない回答者が同数程度であった。これは一貫した傾向を認める上での条件になった。第2に、ここで示された傾向はOFWに対する評価において個々の回答者の評価と比べた何ら優れていることを意味するものではない。

われておらず、考えの擦り合わせや熟考が促されるものではないからである。したがって、参考意見の集積としての域を出ないものであろう。OFW についての見直しや改善について判断が求められるのであれば、それは別の場でなされるのが適切だろう。

文末資料：質問文と回答選択肢

	質問文	回答選択肢
氏名	あなたのご氏名を教えてください。	自由記述
役割	あなたが OFW に参加された際の役割を教えてください。（複数回答可）	OFW 委員長、OFW 委員（委員長以外）、OFW 担当助教、その他
調査国	あなたが OFW に参加された国はどれですか。（複数回答可）	フィリピン、タイ、インドネシア、カンボジア、韓国、中国
調査国の訪問経験	あなたは OFW に参加される前に、その OFW 調査国を訪れたことがありますか。	あった、なかった、その他（一部はあり、一部はなかったなど）
調査経験	あなたは、GSID の OFW（学生として）あるいは類似の実地研修・実地調査活動、個人で行うインタビューやサーベイに参加されたことがありますか。（複数選択可）	学生として GSID の OFW に参加したことがある、OFW に類似した小集団での実地研修・実地調査に参加したことがある、個人でインタビューやサーベイを行ったことがある、いずれもない
勤務年数	あなたが初めて OFW に運営側として参加された時、GSID での勤続年数はどれくらいでしたか。	1 年目 2～3 年目 4～10 年目 11 年目
年代	あなたが OFW に運営側として参加された時のおおよその年齢を教えてください。（複数回答可）	20 代、30 代、40 代、50 代、60 代

達成度：開発課題の理解	あなたのお考えでは、OFWは参加学生にとって「途上国が直面する開発の諸課題を学生が直接見聞し、実践的に理解する」という目的はどれくらい達成されていますか。	全く達成されていない、あまり達成されていない、ある程度達成されている、大いに達成されている
達成度：調査スキルの習得	あなたのお考えでは、OFWは参加学生にとって「フィールドワークに必要な基礎知識やスキルを身につける」という目的はどれくらい達成されていますか。	全く達成されていない、あまり達成されていない、ある程度達成されている、大いに達成されている
達成度：利害調整・問題解決能力	あなたのお考えでは、OFWは参加学生にとって「さまざまな利害関係者の間で問題解決を図るために必要な見識や能力を身につける」という目的はどれくらい達成されていますか。	全く達成されていない、あまり達成されていない、ある程度達成されている、大いに達成されている
達成度：多様な参加者との調整能力	あなたのお考えでは、OFWは参加学生にとって「異なる文化的・専門的背景をもつ参加者とのコミュニケーション能力をつちかう」という目的はどれくらい達成されていますか。	全く達成されていない、あまり達成されていない、ある程度達成されている、大いに達成されている
目的の変化	初めて OFW が実施された1992年から、24年が経ちました。この間、OFWの目的は変化したのでしょうか。もし新しい目的が生まれているとしたら、それは何でしょうか？	自由記述

改善点	OFW の目的が十分に達成されるために、改善されるべき点は何でしょうか。	自由記述
調査前課題	OFW の本調査を開始する前に、何が困難でしたか。（複数回答可）	グループワークの指導、カウンターパート（大学、現地政府など）との調整、事前調査の実施、調査目的の設定、本調査に向けての移動・宿泊・支払などの調整、事前講義の設計や運営、調査対象国や対象地の選定、参加人数の設定、前年度からの引継、予算書の作成、その他
調査前課題：対処	上記の困難な課題に対処するため、どう対処しましたか。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。（簡潔にお書きください）	自由記述
調査中課題	本調査の期間中、何が困難でしたか。（複数回答可）	健康や治安面でのリスク対策、グループワークの指導、カウンターパート（大学、現地政府など）との調整、移動・宿泊・支払などの調整、その他
調査中課題：対処	上記の困難な課題に対処するため、どう対処しましたか。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。（簡潔にお書きください）	自由記述
調査後課題	本調査からの帰国後、何が困難でしたか。（複数回答可）	レポート執筆の指導、グループワークの指導、最終発表会のための指導、決算書の作成、その他
調査後課題：	上記の困難な課題に対処するため、どう対処しました	自由記述

対 処	か。あるいは、特にどのような点に留意すべきでしょうか。（簡潔にお書きください）	
意義： GSID 教員	あなたのお考えでは、OFWは参加するGSID教員にとって、どの程度意義があるでしょうか。	5（大いに意義がある）から1（全く意義はない）までの5点尺度
理 由	そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。	自由記述
意義： カウン ターパ ート	あなたのお考えでは、OFWはカウンターパートの大学やその教員にとって、どの程度意義があるでしょうか。	5（大いに意義がある）から1（全く意義はない）までの5点尺度
理 由	そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。	自由記述
意義： 現地政 府	あなたのお考えでは、OFWは調査対象地の政府や人々にとって、どの程度意義があるでしょうか。	5（大いに意義がある）から1（全く意義はない）までの5点尺度
理 由	そのようにお考えの理由をお聞かせいただけますか。	自由記述
OFW の今後	OFWは今後、どのように運営されるのがよいとお考えでしょうか。その理由とともに、ご意見をお聞かせください。	自由記述

参 照 文 献

長峯晴夫ほか（1994）『海外実地研修 Overseas Fieldwork (OFW)―その基本理念と手法について―』名古屋大学大学院国際開発研究科
 梅村哲夫（2002）『海外実地研修（OFW）業務の手引き』名古屋大学大学院国際開発研究科

長田博ほか(2004)『国際開発協力人材育成のための海外実地研修手法の開発』科学研究費補助金研究成果報告書(研究課題番号 13490014)

廣里恭史・大橋厚子ほか(2007)『国際開発分野における自立的研究能力の育成—フィールドワーク能力強化を中心に—』文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ平成17年度採択プログラム成果報告書